

哲學研究

第百廿九號

第十二卷
第十二册

プラント哲學私斷第一・三部論

菊池慧一郎

此私斷は著述さして起草したもので、其點から云つても、また吾が立場——其は無立場の立場に他ならないが——からしても、其體裁が一般の哲學論文とは全く異つてゐる。私は之を此哲學研究の一部を借用して掲載することによつて、諸賢の批評を得、益々自ら想を練りたいと心掛けてゐる次第である。此三部論がプラントの倫理道德説を中心としてゐることは、當論の序文の明示する通りである。所謂るイデア論、政治論は、追つて之を展開する時期があらう。

德論 第一

第一章 序論

▲「おゝ親愛なる友よ、君はアテナイの人である——智慧と強勢とに於て最も偉大

にして最も裕福なる此都市の——而も財産其を君ができるだけ多く所有する様にと、また評判と名譽との面倒は見るが、心智と眞こと、また魂其ができるだけ善くなる様にと、面倒を見ないのみか、考慮もしないで、君は羞しくはないのか。・・財産よりして徳は生じない、むしろ徳よりして財産も其他の事一切が、公にも私にも、人々にとつて善になるのである。』(アポロ・二九D・三〇B)

是れ實に、彼を罪に陥れんとメレトス等によつて提起されたる誣訴に對して辯明すべく自ら公判廷に立つた老ソクラテスが、辯明の形式の下に彼の救世的任務遂行に、げに最後の努力をなしつゝありし際に、人の何より先きに當に進むべき道として、特に彼の同胞に向つて發したる警告である。しかし此警告はまた、其文化的浮華に於てと等しく其徳の等閑に於てアテナイの盛時とさまで逕庭なきが如く見ゆる現代に蝨々區々として盲動してゐる我々にとつて、等しく聖者の苦言として聽かれねばならない。否、むしろ我々は、一見單純極まる此教示が、浩瀚たる倫理書にもまさつて、強き反省を我々に促さずには措かぬ或神祕なる威力を藏してゐることを、感せずにはゐられない。同様に彼との交際を楽しみ得た當時の俊英、特にもプラトンの若き魂に、ソクラテスの言行其根源たる精神は、深くも強き感銘を與へた。アポロギ

ア篇、其は彼がソクラテスの眞面目を、彼に死刑を加へた社會に向つて、それこそ辯明せんとして著はしたと云ふよりは、其心に忘れもやらぬソクラテスの偉大なりし面影を再び現實の姿に眺めん爲に綴つたものではあるまいか、恰も彫刻家が逝きにし戀人の像を最も思ひ出多き時の姿に刻まねば息み難きが如くに。其動機の推察はとにかくとして、我々は其篇中にソクラテスの眞面目に接し、また彼よりプラトンへの殆どあらゆる連鎖を發見し得る、而も其連鎖中に於て、今し掲げし徳への警告が明示してゐる通り、先づ第一に開花し、第一に結實したのは、實にこの徳についてであつた。

▲徳についての結實。一體何が結實したのであるか。プラトンが・とか、プラトンの魂が・とは不幸にして云ふことができない、其處に聖域に入れるソクラテスと哲學者の巨擘として一家を成したプラトンとの決定的相違がある。然らば何が結實したのであるか。云ふ迄もなく彼の哲學的研究が、其思想がである。此決定的相違の抑々の因由はと問へば、或は之を兩個性の生れながらの力量の相違にでも歸してをかねばなるまいが、しかし之に決定的方向を與へたる一楔機を我々は同じくアポロギア篇の中に發見することができる。ソクラテス曰く

『若かい者どもは僕の後をついてまわり——特に暇を有する富者の子弟であるが——勿論自分勝手に、そして人々が審問されてゐるのを聽いて喜び、やがては彼等自身も屢々僕を真似て他の人々を審問してみた、而も其結果、或事を知つてゐると思つてはゐるが、恐らく實際には殆ど全く知らない人々を、彼等は非常に多く發見したのである。』(二三C)

此審問こそプラトンに於て哲學的研究とはなつたのである。勿論アポロギア篇と其他の篇とを讀み比べるならば、人はソクラテスの審問とプラトンの哲學的研究との間に、やはり決定的相違のあることを知るであらう。しかし其内面的相違は今措きて、其外面的相似のうちにも、おのづから又相違が現はれてゐる。ソクラテスの審問の對象は人であつた、そして其人が眞に智であるか否か、其人が眞ことを知つてゐるか否かの審査に際して種々なる問題が論議されたに止まる、之に反してプラトンの、ソクテテスを真似たる審問探査に於て、其對象は問題に、其目的は知識に推移し、従つて人は問者たると答者たるを問はず、其探究進展の支持者たるに過ぎなくなつた。此遷移はしかし此世界に始めて純性哲學なるものを生み、其問答法をして哲學的方法にまで發展せしめたのである。此方向轉換に與つて力有るものは、プラトン

自身の獨創的英才と、ソピテスとの葛藤とであつたには相違ないが、而も之によるのみと速断してはなるまいと思ふ、なせかと云へば其楔機をも我々は兩者の關係中に見得るからである。我々は之を忘れてはならない、若かきプラトンが老ソクラテスより他の事柄とゞもに、特に徳を當に第一に考慮すべき問題として課せられたことを。かくて徳についての研究はプラトン哲學の門出を飾ることゝはなつたのである。

▲我々は以上の序説によつて徳論第一が取扱ふ問題の性質を明かにし得たであらう、乃ち徳についてのプラトンの哲學的探究が如何なる點より出發し、如何なる過程を通つて、如何に成就したか、を明かにし、而も更に其明かにされたる所性によつて、其がどれ程まで徳論としての權威を有するか、をも併せ論じてゆかうと思ふのである。しかし其に先だつてもう一つ、問題の重要なる限界について語つて置かねばならない。

最初に掲げられたるソクラテスの警告の中に、徳と同時に善と云ふ言葉が見出だされる、而して事實、徳が問題とされる時に、善は度外視さるべくもない、兩者は何よりも密接なる關係に立つてゐるのである。しかし徳については有徳と無徳との對立

が善については善と悪との對立が考へられる、其對立關係が同様でないのを見るならば、兩者は何等か異つた姿をもつてゐる、と云ふことができよう。孟子曰く

可欲之謂善充實之謂美(盡心下)

可欲なるものは俗に總て善きものと呼ばれてゐる、しかし善と呼ばれてゐるものが常に而して普遍的妥當に而して眞に善である、と斷定することはできない、其は、意馬心猿の欲望する所の者が善の批判に於て常に反つて惡と決定されるのを見ても、明かである。そこで善が中心問題となる時は、「此可欲なる者は果して眞に善であるか、どうか」と云ふ問から批判的に出發し、人々が常に追求してゐる快と、避けんとする不快とが考察の中に取り入れられ、譬へばカントが其倫理學的批判に於て快と不快とを度外視せる自由意志に善を判定したるが如く、この善の問題は徳其物に關すると云ふよりは、其普遍的妥當の根據の討檢に始まり、眞に可欲なる、目的論的なる、倫理的、生活の理想の設立に終る、従つて其處では具體的現實性の如きは殆ど問題の中心に這入つて來ないのである。

之に反して人が眞善を探ね、之に達し得て體せる時に、善の體に充ちたる姿、是れ徳であり、是れ美である、従つて徳は、一般に美が具體的である通り、具體的であり、現實的

である、徳が世に善徳とよりは寧ろ美德と呼ばれてゐるのも亦宜ではないか。故に孟子曰く

君子所性仁義禮智根於心其生色也睟然見於面盎於背施於四體四體不言而喩盡心上

今プラトンの思想を検しても、徳は常に具體的なるものとして取扱はれ、繰返し徳は最も美なるものであると云はれてゐる、其は後章に詳論される通りである。然るに人は彼が「徳は美なるものである、美なるものはまた善なるものではないか」と云ふ論法を好んで用ゐてゐるのを見るに相違ない。其は如何なる仕儀か。ヘラス語に於て、カロン・美とアガトン・善とは、或は殆ど特に區別なく、好良の意に用ひられもするし、或は讚辭等に於て「美しくも亦善き人」と云ふ場合の如く、好んで重用されもする、此俗用を以て一應は會し得られるであらう、而も猶敢て同類語分別の權威プロヂコスを眞似る譯ではないが、兩者の間には區別が認められる、即ち善は因位に、美は果位に名づけられてゐる、アガトンが勇敢堪能有益等の義を含むのも、其因位的能力の故である。そこでプラトンの此換言の由來を察するに、其は彼が形而下の徳相よりも形而上の徳體に着眼し、徳行の根源——無論具體的なる根心の徳を把握しようとする場

合に於て行はれてゐる、従つて其善は先の倫理學的に批判的に打開される、非具體的に理相的に因位に立つ善とは勿論其趣を異にしてゐるのである。此相違に基いて我々は善を中心問題とする思想を徳論に於て取扱ふことを避け、之を善論第三に譲ることにしようと思ふ。

▲徳は善の具體的姿である。今またカント思想を譬へに用ゐて之を説明するならば、若し徳の因を自由意志と云へば其果なる美德は、之を左右に取つて其原に逢ふ（離婁下）底の心の自在なる活動であり、其自體は倫理的生活の理想ではなくて實に其現實である。我々はかゝる人々を有徳、特にも聖人と云ふ、而して此聖人を云はば理想とする者、是れ即ち所謂賢者である。泰西には聖人が乏しくはないであらうか、而してカントの眼前には明かに聖人が無かつた、是れ彼が倫理的生活の理想を、人格性を有するが如く装つてはゐるが、實は全く超人的非具體的なる神に認めざるを得なかつた所以である。神のみ善であり、生れながらの我々人間は惡である、と云つたカントも、神のみ智、ソポスであり、我々は絶えず智慧を欲求して努力する愛智者、ピロンポスである、と語つたプラトンも、共に是れ哲學者である。しかしプラトンの眼前には、キリスト教的な神は無かつたが、泰西に恐らくは唯一の聖人が在つた、是れ乃

ち彼に、倫理學以外に、徳論の有る所以であり、また其聖者を對談者に久しく假りて歸さなかつたが爲に、彼自身の亞聖的所説までが強くも讀者の心を囚へ、よつて後世を益しまた害した所以でもある。そこで彼はなる程一方では後生の及ばぬ迄に泰西的の哲學者ではあつたが、しかし他方では、泰西のあらゆる大思想家と全く異つて、實に東洋的の賢者でもあつたのである。つまり賢者プラトンは聖ソクラテスの根心の徳、即ち心・智を探究し追求した。

孟子に此句有り、曰く、宰我子貢有若智足以知聖人汗・・と。今は一般に汗字の前で句讀を切つてゐる、然るに蘇老泉は汗字の下で句讀を切り、彼一流の三子知聖人汗論三蘇文集卷十二を展開してゐる、其説に曰く

汗下也。三子者其智不足以及聖人高深幽絶之境而徒得其下者焉耳。・大者見其大小者見其小高者見其高下者見其下而聖人不知也。・太山之高百里有却走而不可見者矣有見而不見其趾者矣有至其趾而不見其上者矣而太山未始有變也

此句讀の是非は別として、其説は甚だ面白い。老泉先生は常に其見識を振廻し過ぎる傾がある、若し先生をして孔子の小子たらしめたとしたら、果してどの程度まで其大を安んじ得たかは疑問である。古來獨覺の大聖を圍繞してゐた者で、番に其師と

比肩し得なかつたばかりでなく、其眞面目を看破し得た者と雖も、殆ど無い、其は恐らく其全人格を一眸の内に收め得る距離を持ち得なかつた爲であらう。賢者プラトンにも亦實はソクラテスの眞智を捕捉することができなかつたのである——捕捉を許さぬものを捕捉しようとしたからできなかつたのである——そこで彼が捕捉し得たと信じたものは、印度ならぬ亞米利加であつた、而して其未開地に斧鉞を思ふ儘に振つた彼は、遂に知識の富豪たる哲學者の先驅になつてしまつたのである。

我々はプラトンの潑刺たる開拓力、遂に自らを知識の富豪として安息することを屑しとしなかつた其活動力に驚異することも、其聲に魅せられ終つてはならない、むしろ其中より賢者の聲を聴き分けて、一帳羅のトリポンに身を包んでゐた豪僧ソクラテスの無知の智を看破し、以て彼の徳體に接觸し、其化を被り、以て大いに其宗風を宣揚すべきである。若しヘラス文化の遺業が千有餘載後の今日、猶我々東洋人に期待する所が有るならば、恐らく其は特にも此點に於てであるに相違ない。さて其劈頭が獨立不羈なる吾がソクラテス觀を以て飾られる徳論第一に於ては、賢者プラトンの考察が打開論評される、次に智論第二は兩者の智の相異及び關係を説明すること、を以て主題とし、而も其處に聖智の祕鍵を藏す、従つて吾がソクラテス觀は此に到つ

て完結する、而して善論第三は哲學者プラトンの倫理學的思索の迹を追ひ、其處に設計されたる人生の理想を開示し評價する、茲にプラトン理想主義の眞面目は、前二論を過て、全く展開され終るのである。

第二一章 ソクラテス觀の序

▲徳は具體的なるものである。そこで端的に徳を主題とするものは勿論、徳の原理の純理論的展開と雖も、苟くも徳についての考察である限り、其は具體的なる現實の徳を度外視してはならない。是れ、カントが自由を二律背反より救つて批判的倫理學を展開するに先だつて、具體的なる我々の道義的意識を主題とした形而上學の有り、また當に有るべき所以である。さて我々の眼前には忠孝等の諸徳あり、また其有徳も無くはあるまい、同様にプラトンの眼前にも修身倫理の先生がゐる通りに、否其諸徳及び其有徳があつた。また我々の世界にも修身倫理の先生がゐる通りに、否其とはかなり色彩を異にしてはゐるが、人々をより善くすることを宣言し、教授料を法外に取つて當時のアテナイに時めいた、職業的有徳とでも稱さるべき所謂ソピステス等がゐたのである。かくてプラトンも其考察を其諸徳にと同時に其有徳にも向け、而も他面皮肉なる批評を其ソピステスどもに浴せかけた、我々は其痛快なる場

面を彼の諸篇の到る處に見ることができらる。

しかしプラトンは我々のごと相似たる世間の諸徳と其有徳をもつた以外に、而して勿論其以上に、恐らくは泰西史上にまたなき唯一人の有徳、聖ソクラテスと相ひ交つてゐた、此具體的者こそ彼の考察を考察する上に忘るべからざるものである。ソクラテスは、思ふに、恰も彼が新なる神を設けたと云ふことが誣告であつた通り、別に新なる徳目を世間に作り出した譯ではなかつた、世間の徳は世間に於てどこまでも徳である、従つて世間の有徳とソクラテスとは、其徳の形名を同じくしてはゐる、而も兩者の間には比較にもならぬ相違があつた、其知行合一に於ては諸有徳の萃を抜き、其言行一致に於ては勿論徳の教師等の倫を離れてゐた、一言以て之を斷ずれば、ソクラテスは實に徹底してゐたのである。孟子曰く

舜明於庶物、察於人倫、由仁義行、非行仁義也、離婁下

世の有徳は皆諸徳を強つて勉行するの域を脱してゐない、之に對して圓熟した老ソクラテスは、云はゞ自由の法則に従つて當に爲すべき事を、所欲を克服して行つたのではない、寧ろ孔子の如く、其心の所欲に従つて矩を踰えざる域にまで達してゐたのである。プラトンは實に此ソクラテスを中心問題とし、其徳の眞諦を把握せんとし

て、徳の考察を進めた、従つて我々も活眼を以てソクラテスを看破し得なければ、またプラトンの徳についての所説を正しく解了し判定することはできない。

▲然るにソクラテスは泰西の諸哲にとつて全く評價し得ぬ問題であるらしい、そこで言一度彼に及ぶ時誰しも先づ問題であることを告白せぬ者はない、而して一步を其評價に進むる時、或は彼をプラトン哲學の先驅者として、評するに倫理學的概念の發見者創設者を以てし、或は道念の救濟殉教者と云ふ表面的な讃辭を以てし、或はまた極力高價に見積らんとしては、プラトン哲學前半の大部分をすら彼に割讓することによつて、稀代の哲學者を以てせんとするなど、諸説紛然として裁する術を知らざらしめる、而も此渦中に我々はまた一大巨岩を投じようとしてゐるのである。然るに彼等の見解と我々の見識とはしかし全く天地懸隔してゐる、其故に我々は其一一々について批判しつゝ、破してゆく必要を認めない、また其様な所謂科學的興味も持ち得ない、しかし他説に依據して異説を受け入れ得ぬが如き人々は暫らく措き、我々の如く獨立不羈なる讀者は吾が全論よりして自から覺悟するところ有るを信じて疑はない。

泰西の諸哲は其獨特なる倫理學をもつてゐる、しかしソクラテス程の有徳を識る

こと稀であり、従つて之に私淑するの道を心得てゐない、然るに我々極東の士は、なる程泰西に見る如き所謂通俗平凡なる倫理的生活の基礎づけの爲に、理論的推考の上に建立されたる倫理學はもつてゐなかつた、否むしろ其必要を感じなかつたのである、しかし堯舜の古へより、即ち有史以來、歴代殆ど有徳の士を缺くことなく、従つて常に聖賢の心底に出入し、以て其化を受けんとする努力、是れ實に古典學的努力に他ならないが、之に於ては彼に比較さるべくもない傳統的精神を有してゐる、彼此見解の相違は先づ第一に其起源を此に有してゐるのである。人若し泰西にのみ發達せる科學と極東にのみ獨特に榮え來つた禪那とを對比して見たならば、兩者の氣習の相違を知るに難くはあるまい。

そこで我々はソクラテスに對しても、其有徳を讀むに當爲を以てはしない、勿論また當爲思想を引出すに都合のよさうな文獻を無理に探ね出して、其に據つて彼を價值づけもしない、更にまた彼等にどつて金科玉條たる客觀的眞理を目的とする歴史的認識にのみ立脚し、當時の思潮の人生論的轉換に關して占むる彼の思想史上の地位を指示することに満足し、プラトン及び所謂の小ソクラテス派の賢者達に及ぼしたる徳化を擧示することによつて、之を二千三百年の過去に葬り去り、自ら其化に

與ることを欲せずして、敢て自ら己を殘賊する程、我々はすさんでもゐない。勿論またアナクサゴラスの思想を若かき時に彼が學んだとか、其小子にピタゴラス學徒であつた者が居たとか云ふ事實を認めねばならないとしても、其は所謂の哲學に安んじ得なかつた彼の徹底力と、哲學を修めたる者も猶其服従を樂しみ得た程の彼の無底心との據證とはなれ、恰も孔子を問禮の一事を以て老子の徒となすが如く、其等を決定的證據として、彼に大思想家、大哲學者たる判定を下し、よつて彼を安價なる相場より救ひ出だせりと信じ、反つて其大徳の眞面目を逸するが如き盲目的崇拜者でもあり得ないのである。

▲泰西の諸哲は何事にも文獻てふことをやかましく云ふ。其文獻なるものはあらゆる記録を指すのであつて、其文獻の批判よりして其中より正しいと思はるゝ記録を選択し、其上に或は史實を確定し、或は人物を評價する、而して是れ文獻學の主要任務である。是れは勿論正當極まる程正當にして同時に不可缺なる研究である、なせかと云へば事實我々は、父母兄弟朋友との間と雖も、音聲・文字・顔容態度等の所謂の色界の仲介を借ることなくしては、互に交際し得ない、古人との關係も亦同様である、つまり古人との色界の仲介が即ち文獻であると云つても差問はあるまいから。し

かし文獻學が史實に對して有する權威と同程度の權威を直ちに人物評價に對しても有し得ると思つたならば、其は大なる過ちを犯すことになるであらう。甲乙の兩人が丙に對して、同時同處に交際しても、互に其人物に對する見解を異にし、譬へば甲は其心底を看破するも、乙は甘く其人を信ずるが如き場合は極めて多い。メデイアは叫んでゐる

正しき判断は人々の眼に宿らず(二一九行)

とまで。要するに若しも色界の仲介が常に無色界の真相を傳へるならば、此世に巧言令色のあらう筈がない、否實は、孔子が鮮矣仁と諭す迄もなく、明々白々に傳へてゐるのであるが、明無き者が或は裝つたり、或は誤認するまでのことである。此に於てか我々は色界を通して無色界をまで看破する力、其こそ見識を養はなければならぬ。

見識の涵養、其道は恐らく多様であらう、しかし若し我々をして言はしむれば、聖賢に私淑し、千世の人物を友とする、其こそ東洋の意味に於ける、古典學の一道のみである。孔子曰く

我非生而知之者、好古敏以求之者也、述而

先づ古言の文法意味等を學ぶ古言學が有る、其上に文獻學が位する、其は考古學である、但し其學とは猶科學の範圍を脱してゐない、其上に古典學が位する、而して其は好古學であり、其學とは歐語の譯語ならぬ學問の謂である。しかし之を縁として我々は更に一步を進めなければならぬ、其は頂門上の一隻眼を打開することである、此に至つて眞心智は生まれ、見識は全く成就する、故に法華に曰く

唯佛與佛乃能究盡諸法實相(方便品)

さて此見識には——勿論其對象は必ず色界に形式を取つて表現すること、猶心情の一切が實は悉く其容貌に顯現するが如くではあるが、而も猶——通俗的に云つて、所謂客觀的尺度無きが如く、従つて諸説紛々たるの狀を呈するのである。此狀を蘇老泉も亦先所引の論中に言つてゐる、曰く

顏淵從夫子游出而告人曰、吾有得於夫子矣、宰我子貢有若從夫子游出而告人曰、吾有得於夫子矣、夫子之道一也、而顏淵得之、以爲顏淵、宰我子貢有若得之、以爲宰我、子貢有若、夫子不知也

然らばかゝる見識の相違は如何なるものであらうか。思ふに其は水火の如き異種の相違ではなくて、明暗高低の如きに比さるべきであらう。そこで低くして暗き見

識は高くして明かなる見識よりは全く照了され定價され終る、反對に高きは低きによつて評價さるべくもなく、従つて時には往々誹謗を免れない。しかし低き見識と雖も、決して其本性上低い譯ではない、貪瞋癡に障礙されて低くさせられてゐるのである、そこで一度其低級なるを自覺する時、高きに接して行くことによつて淨化され教養され、遂には一隻眼を打開し得て、古哲と眉毛を相ひ結び同一眼に見同一耳に聞くの境涯にまで到るのである。

▲さてプラトンの如く、其著書の現代に傳はれる者は、其人物の商量に於て、また其思想の究明に於て、我々の思惟が鋭敏でさへあれば、或は大なる見識を要しないかも——我々は勿論、かもと云ふ——知れない、しかしソクラテスの如く、全く著書を缺き、全く文獻——我々がかゝる場合に特に文獻と云ふ詞を用ゐるのが妥當であると信するが——に據るより外に、之と交通する路なき者に於ては、見識の力にまつこと極めて大でなければならぬ。孔子曰く

夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、文獻不足故也、足則吾能徵之矣（八僂）

我々は見識と文獻とを、孔子が認めたる價值と意義とに於て、尊重する、彼は我々にど

つて、述而不作、信而好古、溫故而知新に於て、眞に古典學の師表であるから。吾がソクラテスは此精神によつて成せられる、しかし蘇子の評の如く、之を得て以て菊池慧一郎と爲すの類であるかも知れない。凡そ何者の何觀にもせよ、其半面に於て其はまた觀者の見識の開示でもある、由つて恐らくは茲に、我を知る者と、而して彼が稀代の人傑である點に於て、また我を罪する者とをもつであらう。

知らず識らず我々は、アルキピアデスの評して傲慢なる男ヒブリスタース(シムボ・二一五B)と云へる老ソクラテスを眞似て、大言壯語・メガレーゴリア(クセノボン・アボロ・一)としてしまつた。此大言壯語はしかし氣早な人々をして、我々が全く自己の勝手な解釋を以て、ソクラテスを想像し、恰も暴雷に震死せるロムルスを神に遷化せりと信せし原始ローマ人の如く、神聖視してゐるのである、と誤解せしむるかも知れない。なる程見識は、洒落て云へば、心智の、アプリオリなる能動ではある、しかしア・ボステリオリなる文獻等を缺きて活動はしない、而して我々はソクラテスについて或程度まで充分に據證たり得る文獻をもつてゐる、つまり其文も其賢も彼の弟子であると同時に稀なる賢哲であつたプラトンに他ならないのである。我々が今大いに見識の重要を力説したる所以は、事が泰西に屬し、泰西に此見識の活躍が缺けてゐるが

爲であつて、若し我々をして東洋に向つて發言せしむるならば、大いにヘレニズムを鼓吹し、内藤博士が劉向劉歆の學風を尊重され、狩野博士に井戸鼎の讚辭有るが如く、否更に數歩を下つて先に所謂る古言學的研究の必要をも力説する次第である。我々はソクラテスの上に、またプラトンの上に忌憚はく我々の見識を開示して行く。そこで或は未知の單なる史實、文獻の無見識なる羅列に接しても、單に之を知ること、を以て満足する底の人々、或は其等が華麗なる文字を以て而も如何にも見識ぶつて巧みに綴られてゐるか否かによつて感服したり嘲笑したりする人々を恐れぬ、しかし其事實の上に加へられたる毀譽褒貶、また關心の所在よりして我々の見識を問ひ、我々の人物をまで商量する、孟子の所謂る、知言の士の現はるゝ時、我々は千載の後と雖も唯其人傑のまへに畏れを禁じ得ざるのみである。さて德についてのプラトンの考察を解了するに缺くべからざるソクラテス、我々は先づ其巍々乎たる雄姿を、我々の見識によつて擇出されたる文獻の上に、展望してゆかねばならない。

第三章 ソクラテス觀上

▲孔子曰く

視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉（爲政）

我々は何等迷ふことなく、孔子の指示した此方針に従つて、ソクラテスを見てゆくのである。プラトンの考察は、思ふに、第二の其所由、所謂アルケー、に向けられてゐた、而して之を正視せんとして、また自己の所説を生かさんが爲に、屢々其所爲を想起し、之を我々に告げてゐる。是に由つて我々は幸にも其所爲の數々を熟視することを許されてをり、之を通してまた端的に其所由、進んでは其所安をまで觀察することができ、而して其結果一方ソクラテスの眞面目は躍如として露はれ來り、他方プラトンの考察の状態、従つて其所説の眞相は明照され終るのである。

今迄のソクラテス觀者は殆ど總て、タレスやアナクシマンドロスの所説を推定すると同一なる學究的態度を以て彼に向ひ、クセノボンやプラトン等の記録からソクラテスを説くに都合のよさうな言辭を抽出し來つて、其所説の模様を想像したり、また其所爲を語るにしても、其を單なる行爲の報告に留ぎめ、其上に鋭き價值判斷を下すことをせず、的々の實際を逸して、或は其評價の據證を思ひもかけぬ幽冥の方向に求めて得々としてゐるか、或はソクラテスをして進歩せしむれば自己の哲學に到ると云つた様な評價を試みてゐる。しかし思へ、苟くも徳聞を以てのみ其令名を後

世に傳へてゐる者に對して、かゝる研究的態度を取ると云ふことは、其論者の見識は勿論、其人物の如何をも問はしめるであらう。なせかと云へば、苟くも徳の修行に苦しんでゐる者であるならば、我々の如き薄徳者であつても、ソクラテスに對してかゝる態度は取り得ない、そこで取り得て自ら怪しまざる者は、よし孟子の所謂る、可欲の善人であつても、其は生來の善人たるに留ごまり、自ら全く徳について考慮したことを知らない者である、と云ふことだけは明白であるから。ソクラテスは決してソピステス等にとつての試金石であつたばかりではない、此世の續く限り、彼に觸れる者は其正體を暴露せずにはすまないものである。

さて我々は此から彼の徳の最も具體的なる形相、即ち色界の行動、即ち其徳行を見、次第に形而上へと其觀察を推し進めてゆかねばならない。

▲ソクラテスは其辯明の中に曰つてゐる

『少くも僕は此等について諸君に大なる證據を供しよう、但し言論ではない、寧ろ諸君が尊重する所の者即ち實行である、諸君は僕の事件を聽き給へ、以て僕が正義に反し死を恐れて何者にも譲ることをせず、譲らずして寧ろ死すとも構はぬと云ふことを知り得る爲に。僕は裁判の際にはおきまりの低級なる文句、滅刑の爲の善行の

陳述を語ることにならう、しかし眞ではある。さて儂は、おゝアテナイの人々よ、此都市に於て別に支配權を行使したことはなかつたが、しかし嘗て議員であつたことがある。そして我々のアンチオキスピレ（政治區）がブリタンネイス（主裁議員）の役を演じてゐた丁度其時に、諸君は十人の將軍を、海戰に於て歿した者どもを葬らなかつたかぞで、一括して有罪にしようと云ふ議案を提出した——法律に反して——其は後になつて諸君の誰もが意識した通り。其時に儂はブリタンネイスの中で唯一人、諸君に向つて、法律に反した行動をとるな、と反對し、そして反對投票を行つた。辯護士どもは進んで儂を告發し拘引しようとし、諸君は之を督勵し喚めき立てた、しかし儂は、累紲や死を恐れて、正義を議定しない諸君と與なるよりは、寧ろ法律と正義とに組して危險を冒すべきである、と思つた。此事はまだ民權政治の折の事であつた』

(三二A—C)

我々は此行爲に於て特にも彼の正義の徳を讚嘆する、同時に韓文公の名言を思ひ起さずにはゐられない。伯夷頌に曰く

士之特立獨行・*・不顧人之是非皆豪傑之士信道篤而自知明者也一家非之力行而不惑者寡矣至於一國一州非之力行而不惑者蓋天下一人而已矣

孟子の見識に深くも養はれ、而も今、伯夷、叔齊を眼前に拉し來つた韓文公は、更に一句を第二句目に挿んでゐる、曰く、適於義而已と。然るにソクラテスを頌する爲には、其一句は全く不用である、即ち其義は、なる程當時のアテナイ市民は總て、同胞を遺棄した將軍に對する激怒のあまり、之を非としたかも知れない、しかし其激怒が沈靜した後、の彼等も、かゝる感情から全く自由なる者も、其こそ窮天地、亘萬世、何人とも雖も之を是とする所の義、即ち實に伯夷の隘(公孫丑上)なき正義である。但し我々はソクラテスに、伯夷にと等しく、聖の清(萬章下)を認めねばならない。

▲ソクラテスは更に語を繼いで曰つた

『次いで寡頭政治が出現した時に、三十人執政は儂を五人の一人としてトロス(アゴラ)に面して建てられてゐる議政壇に呼び出し、サラミスからサラミスの人レオンを死刑に處する爲に連て來ることを命じた。此様な事を多く、彼等はまた他の者どもにも、できるだけ多くの人々を罪に陥れる目的を以て、命じてゐたのである。しかし其時儂は言論を以てせず、實行によつてまた、儂は——若しかく言ふことが亂暴でないならば——死などには一向頓着しない、しかし不正にして不敬度なる事は何事も行はない、此事をのみ配慮してゐるのである、と云ふことを明示した。なせかと云

へば其主權は、不正を遂行し得た程強力ではあつたが、儂を威嚇することはできなかつた、そこで我々がトロスを出た時に、四人の者はサラミスに赴いてレオンを引張つて來たが、儂は別れて家路についた。恐らく此事によつて、若しも其主權が忽ち顛覆したのではなかつたならば、儂は殺されてゐたであらう。而して此事について諸君の多くは證人となるに相違ない。』(三二C D)

此行動に於て、我々は其事情を詳かにし得ないが、三十人執政はソクラテスに此命令を下してゐる、しかし彼等が一介の市民たる彼を其爲に呼び出すと云ふことは一寸考へられない、恐らく暴戾なりし彼等も當時既に拔群の偉傑として其勇名を知られてゐたソクラテスに一目置き、よつて彼を何等かの役につかしてゐたのではあるまいか、とにかく事實彼は其召喚に接し、而も之に應じてゐる。茲に我々は柳下惠を思ひ出す、孟子曰く

柳下惠不羞汙君不辭小官進不隱賢必以其道阨窮而不憫由由然與鄉人偕而不自失焉故曰爾爲爾我爲我爾焉能浼我哉公孫丑上萬章下

更に見よ、彼は無言にして立ち去つてゐるではないか。自ら清廉を以て任ずるの士は既に其召喚に應ずるをすら屑しとしないであらう、而も之に應じて而もまた此舉

に出づることは、實に難中の難、ソクラテスの如き大聖に非らずしては、全く實行、更に下つて豫想さるべくもない行動である。深き思慮の徳、生死を眼中に置かぬ勇敢の徳、先所引の四體不言而喻とは實にかゝる事を謂つたのではないか。我々は彼に、柳下惠にと同様に、孟子の所謂る聖の和を認めることができる、しかし其不恭をも認むべき所は無い。

▲以上二つの行動のみが傳へられてゐたとしても、ソクラテスの品位は定つて動くまい。孔子曰く

不得中行而與之必也狂狷乎。狂者進取狷者有所不爲也。(子路)

伯夷は狷の至聖、展禽は狂の至聖と評し得よう、而してソクラテスは、孔子の如く、實に中の至聖である。人は自己を彼の境遇に置き、之をまざまざと想像し、さて其行動が果して自分にできたか、できなかつたか、或は如何なる行動を取るか、等を考量してみる必要がある。第一の場合には狷狂の猶能く行ひ得る所であらう、其處には議員としての責務と國法と同情との規範が明かに示されてゐるから。しかも狷者は之を恐らくは冷靜に敢行し得よう、之に反して狂者にあつては、當初は志が氣の帥として之を動かすと雖も、終には不正に奮慨するの氣が趨つて、其志を反つて引摺るの状を呈

するに相違ない。然るにソクラテスを念じて見ると、彼の眼前に生死が無かつた様に、正不正も無く、従つて蜂の巢を破つた如き喧囂の中にあつて、易々と善く正を實現せしめたとしか思へない。更に第二の場合に至つては、狂狷者流の豫想を全く超えてゐる。中庸に曰く

喜怒哀樂之未發謂之中發而中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也

無生死無正不正は心智の中ソクラテスに此中有つて、始めて第二の如き中節の行動が在り得たのである。かく我々が我を彼に移してみれば、彼も亦我に遷り、其偉大なる光輝を我々の中に煥發し、併せて我々の心情をも次第に清淨にする、而して之をこそ徳化とは謂ふのである。ソクラテスを、タレスやアナクシマンドロスを見ると同一態度を以て、ヘラスの賢者、他山の石として眺むる者は、自ら其化を絶つて、其偉大に接することができず、持ち合せの倫理學を以て外面より之を評しようとする、是れ彼を人に誤るばかりでなく、自己を殘賊することに他ならない。行爲の規範が猶其眼前に彷彿たる者、當爲の定言命令が其心上に下さるゝ者、是れ狂狷底の人、聖を去る猶甚だ遠き者である、従つて當爲思想に由つて彼を評することは、即ち彼の聖を堙滅す

ることである、と知るべきである。要するに我々は第一例に於て彼の正義の徳を見た、次に第二例に於て其思慮の徳を——是れ即ち狂氣に對しては正氣、狷者の節制に對しては中節の至美、次に其實行に伴つて顯現してゐる勇敢の徳を——是れ即ち孟子の所謂る不動心、浩然の氣に他ならない、曰く其爲氣也、配義與道、無是餒也、公孫丑上

▲ソクラテスは又曰つてゐる

『喧囂してはいけない、おゝアテナイの人々よ、寧ろ僕が諸君に請ふに、僕が言ふ事に對して喧囂せず寧ろ聽くことを以てした、其ことを僕の爲に守つてほしい、なせかと云へば、僕の思ふに、諸君が之を聽くならば、益を得るに相違ないから。僕は今や更に或ことを諸君に告げなければならぬが、其に對して諸君は恐らく喚き立てることであらう、しかし其を決して爲してはいけない。と云ふのは、よろしいか、若しも僕を、僕が言つてゐる通りの人間を、殺すならば、僕をではなくて、反つてむしろ諸君自身を汗害するのである。なせかと云へば、僕をばメレトスもアニトスも何等汗害し得まい、其力をもつてゐないから、なせかと云へば、より善き人がより劣つた者より汗害されると云ふ法がない、と僕は信じてゐるから。なる程彼は恐らく殺したり或は追放したり或は市民權を褫奪する事はできるのであらう、そして其等の事を此男も亦他

の者も多分大なる悪であると思つてゐる、しかし僕はさうは思つてゐない、むしろ人を不正に殺さんと企てる方をこそ、さうと思つてゐるのである。さて今、おゝアテナイの人々よ、僕は僕自身の爲に辯明してゐる譯では更々ない、人はさう思つてゐようが、寧ろ諸君の爲に、僕を殺すことによつて諸君への神の賜物について罪を犯してはならないと。なせかと云へば他に見出だすのは容易であるまいから、此様な者を、何んてことではない——さう言ふのは滑稽かもしれないが——譬へば大きく立派な馬である此都市に神からくつゝけられた者を——其馬たるや大きい爲に鈍重で、蛇の如きに刺戟される必要がある、神は僕を其様な者として都市にくつゝけられたやうに僕には思はれる、そこで其様な僕は諸君を覺まし、説き、宥め、到る處にくつゝいて終日息むことがないのである。此様な者が他に諸君の爲に起つて來ることは容易ではない、おゝ人々よ、寧ろ若し僕の言に従ふなら、僕を許し給へ。諸君はしかし恐らく憤るであらう、恰も眠つてゐる者が覺まされた時の様に、そしてアニトスに従つて、僕を批ち、容易く殺し得て、以て其後の生活を眠つて終ることであらう、若しも誰か他の者を神が諸君のことを配慮して諸君の許に差遣しないならば。だが僕は神によつて此都市に與へられたかゝる者であると云ふことは、之を諸君は次の事から審に知

り得よう。と云ふのも此事は人間業ではないのだから、僕が自分一個人のことは一切面倒を見ず、家庭を放棄して置くことに耐へ、諸君の事を常に行ひ、私的に一人一人の許に行つては父や兄の如く、徳について勵むように、説服してゐるなどと云ふことは。しかし若しも僕が其等の事から利益を得たとか、教授料を取つて其事を勸告したのであつたなら、彼等は何等か其に言及したであらう。然るに今、諸君が親しく見らるゝ通り、告訴者どもは其他の事をば恥も知らずに此通り告訴してゐるが、さすが此事については、僕が曾て誰かに教授料の高を指定したり、之を要求したりしたと云ふことの證人を供することを恥ぢずにはゐられなかつた。なせかと云へば僕の言の眞なること、の思ふに、充分なる證人として僕は供するから、此貧乏を。』(三〇C—三〇C)

孟子曰く

伊尹曰、天之生斯民也、使先知覺、後知使先覺覺、後覺、予天民之先覺者也、予將以此道覺此民也、其自任以天下之重也、(萬章下)

ソクラテスはまた聖の任者でもあつた。

我々は其所謂る人間業でない、ヘラス的に云へば、ダイモンの行動に、出家

の面影を見ずにはゐられない、而して其所謂る父兄の如く徳を勸進して席の温まるを知らなかつた彼の心情は、博愛仁大慈大悲にあらずして、何であらうか。しかし其出家及び大慈大悲の眞面目、其活動の狀如何、其等は當論の後章及び智論に於て詳述されるであらう、今はソクラテスの宗教的面目を指示してをけば足りる、而して此行動はヘラスの徳目に於て敬虔の徳と呼ばれ得るであらう。

第四章 ソクラテス觀中

△さて我々の見識は彼を以て聖の清和、而して之に加ふるに聖の任なる者と爲した、茲に我々は更に一步を其綜合に進めんとして、先づ其臨終の行動を批判しなければならぬ。ソクラテスは上所引の如き大言壯語、大膽不敵なる辯明によつて遂にアテナイ市民から死刑の宣告を受け、而してバイドン篇、クリトン篇が詳述してゐる通り、アポロンの祭典の爲に其執行まで約一ヶ月を獄中に暮した、其間彼の朋友弟子達は日々彼を訪れてゐたが、死刑の期日のいよいよ切迫するに及んで、彼に脱走の計畫をあかし、其敢行を勸めてやまなかつた、しかし彼は動かなかつた。彼等の識れる人々の中で最も勝れたる、特にも最も思慮に深く且最も正義なりし人は、茲に毒をあ

ほぎ、約七十歳を一期として、歸するが如く此世を去つてしまつた。楚の懷王に致せる屈原の忠貞と、アテナイ市民に對するソクラテスの忌憚なき忠信との間に人は一體とだけだけの逕庭を認め得るか。また屈原は、人生有命兮各有所錯兮定心廣志余何畏懼兮と歌つて、流謫の身を汨羅に沈めて怨みなかつた、ソクラテスは、一度市民の彈劾を受けてまた何等迷ふことなく死を擇んでゐる。賈誼は嘗て屈原を湘流に弔し、賦して曰く

遭世罔極兮、廼隕厥身、烏庠哀哉兮、逢時不祥、賢聖逆曳兮、方正倒植、嗟苦先生、獨離此
 答兮

我々も亦此辭を以てソクラテスを弔はずには居られない。然るに其賦は更に一轉して曰く

般紛紛其離此郵兮、亦夫子之辜也、歷九州而相其君兮、何必懷此都也、鳳凰翔於千仞兮、覽德輝而下之、見細德之險微兮、搖增翮而去之、彼尋常之汙瀆兮、豈容吞舟之魚、橫
 江湖之鱣鯨兮、固將制於螻蟻

ソクラテスの上にも我々はかゝる難を加へ得るであらうか。

▲おゝソクラテス、君が格別アテナイを愛してゐたと云ふことは、其國法が其證據

を擧ぐる迄もなく(クリトン五二B)我々は勿論之を認める、しかし君の救世的努力がアテナイ市及び其市民にのみ向けられねばならない理由は、恐らく發見され得ないであらう。君の先輩にしてアテナイ文化の偉大なる代表者の一人、かの悲劇作家ウリピデス、彼も亦晩年アリストパネスからも、市民からも、無神的汗德的態度の故を以て、君と同様に、彈劾非難された、而して彼は既に没落に傾いたアテナイを去つて、新興の氣に満ち初めたマケドニアの、特にアテナイ文化の輸入に努力せるアルケラオスの朝に走り、其處に其驥足を伸す途を擇んだ。狂瀾を既倒に廻さんとした君の愛國的忠節は、我々の感歎する所である、しかし固よりエウリピデス等とは比較さるべくもない君の天職、其は反對に空しく一州一國の好惡是非に君の死活を制せしむる程、其程輕小なものであつたのであらうか。否むしろ君は、なる程かの王位篡奪者アルケラオス(ゴルギ・四七一)の朝に走ることとは、之を屑しとはしなかつたらう、しかしヘラスは廣い、従つて國法が許してゐる通り(クリト・五二C)、事前にアテナイを去るべきであつたらう、或はアテナイ市民の希望であると君が推察し得た所の追放の刑(アポロ・三七C)を要請して去るべきであつたのだ。

君が自分の刑の提議に先立つて反對に國家より優待されることを至當とする(ア

ポロ・三六D)と云つたのはよい、また何人をも害したことがないと信じてゐる以上、自ら刑罰に値するとして、投獄・追放等の刑を自ら認定するなどは思ひもつかぬことである(同三七B)と云つて、其商量を拒避したのもよい、しかし終に安値ながらも罰金を刑を提議し(同三八B)、敢て市民の反感を買ひ、云は、自ら求めて死刑の宣告を受けた(クリトン五二C)のは、一體どう云ふ譯か。

第一罰金刑の提議をしたのが我々の腑に落ちない。君は其によつては何も害を受けまいから(アポロ・三八B)と公言してゐる、しかし、士有畫地爲牢勢不可入とすら云はれてゐる、また罰金を以て自贖すれば肉體の自由は得られるかも知れない、しかし其行動はやはり自ら刑を盛つたことになる、さすれば、よし放免になつたとしても、以前と同一行動をアテナイに於て取ることを自ら許すことはできない、むしろ既に自ら刑を盛るならば、追放を提議し、他國に教化を布くべきであつた筈である。

然るに君は遂に死刑の宣告を受けてしまつた、しかし其後と雖も、君が其意見を特にも聽くべきであると主張してゐる眞の識者(クリトン四七A・D)は、誰も君の脱走を非難しはしまい、なせかと云へば無罪に敢て極刑を判決した其法は惡法である、ましてや君の如き忠節の有徳を殘賊する者は決して國法ではあり得ない、従つて所謂

破獄脱走は君に於て全く單なる避難たるに過ぎないからである。

▲君は次の如きことを説いてクリトンの強請に應じなかつた、とプラトンは我々に告げてゐる——

人は如何なる風にも決して不正を行(加害)つてはならない、従つて不正を受けた者と雖も、之に報ゆるに不正を以てしてはならない、國家は我々に不正を爲したに相違ない、しかし若し脱走したとすれば、其は國家と國法の權威を破壊することであり、従つて不正を以て報いることになる(四九)

以暴易暴不知其非と。プラトンを始め、泰西の諸哲は此點に於て君を全然是とし、君に國法の忠僕と云ふ讚辭を捧げ、永く君を正義の士として記念するに相違ない。我々極東の士も亦君を義士として尊敬する、しかしプラトンと與に、最も思慮に深かつた、とは評すまい、其所説通りの行動は一つの義に執して自在の妙を失つてゐるから、君は其點で亂臣賊子の戒めとはなる、しかし總ての憂國の志士の龜鑑たることを得ないであらう。

君はまたかく言つたかの如くである——

國家は我々を生み、養ひ、教育してくれた親である、其親の意に順はないでもよい

のか、また國家は我々を支配せる主人である、其主人の命に従はなくても、徳に勵んでゐる者と云ふことができるか、祖國は神々や理性有る人々にとつては母よりも父よりも其他の總ての祖先よりも更に貴く、尊きものである(五〇)

其言は如何にも犯し難き威嚴を備へ、一應は尤もと首肯される、特に國家が健全なる状態にある場合には、しかし病的なる場合、其は決して無條件に承認はされ得ないであらう。譬腹は小子象を愛し、舜を無き者としようと幾度か計つた。若し舜が、其意に順はねばならない、と云ふ——さう云ふのは滑稽かも知れないが——孝の當爲、其規範を墨守して、屢中に焚死するか、井中に溺死する、萬章上ことを擇んだとしたら、彼は以て純孝たり得たであらうか。父の意に順ひ、主人の命に服する事のみが純孝でも忠信でもない、書經の所謂る、烝烝乂不格姦、父にも主人にも惡を實現させない様に努力するに到つて、始めて孝も忠も極まる。君の忠信はなる程、衛の急子、晉の申生、左傳桓十六、僖四の域にまで達してゐる、しかし舜に及ばざる遠きものが有る。君は死が果して惡か否かを知らない、従つて恐れもしないと言つてゐるし、君としては死刑が別に問題とはならなかつたかも知れない、しかし見よ、君が追放よりも死を擇んだが爲に、アテナイの國家と其市民とは、一面泰西最高文化の桂冠を戴きつゝも、他

面拭ふべからざる汗名を歴史上にとめてしまつたではないか。其でも君は國家を貴び尊んだのであるか、また君の所謂る理性を有する者とはかくの如き者であるのか。若しプラトンが傳へた如くであつたとしたら、君は自分一個人が義士としての清節を全うする爲に、君の國家を汗辱して恥ぢざる者である。

君は更に次の如きことを國家の言として語り、其を首肯したかの如く、プラトンは傳へてゐる、曰く

『第一汝は、若し諸都市の中で最も近い、或はテバイか或はメガラかへ赴くとしたなら——兩都市とも良法が行はれてゐるから——其都市の國法の敵として赴くことになる、そして其都市の爲に盡してゐる程の人々は汝を其國法の破壊者として警戒するであらうし、汝はまた裁判官達の爲に、彼等が汝を正しく判決したと思つてゐる其思ひに、裏書してやることになるであらう。』(五三B)

しかし惡法・無法を逃れた者が、良法の國に容れられないと云ふことは、強辯でなくて何であるか。君は、劣つた理屈を勝れしめる(アポロ・一八B)と云ふ彈劾を受けてゐたと、法廷で告白したが、君の此理屈は正に其に相當し、遂に裁判官のみならず、あらゆる彈劾者の判斷にまで保證を與へることになるではないか。

クリトトン篇に於ける君の言論は甚だ事前の君の目覺しい活動と調和してゐない。若し其言の方が眞實だとしたら我々が君に捧げた讃辭の少くも半分は取消さるべきであり、かくてはヘラス古典も、其偉大なる特性を以てして、猶遂に漢古典の次席に下らねばならず、また泰西は全然大聖を失ふことになる。勿論我々は何も強つて君を大聖に祭り上げようと云ふのではないが、我々には其言行の不調和が首肯できないのである。

▲此不調和は思ふに、實行者ソクラテスと著論者プラトンの相異から來たものであらう。クリトトン篇は、ソクラテスが動かかなかつた理由を推度して、若かきプラトンが書き綴つたものである。古への人は其智に於て早熟であつた、しかし三十歳までに覺悟し得た者は稀である、賈誼の英才を以てして、猶一家言ではあるが、自分の心に禍ひされて、充分に屈原を弔ひ得なかつた、同様にプラトンも大聖ソクラテスの心底を看破することができなかつた、其は無理ならぬ事である。

プラトンはしかし此推察よりして多くの問題を孕んだ、彼の理想的國家論が此一小篇に胚胎してゐることは今更茲に言ふまでもない。敢てポリテイア篇を——其は恰もバイドン篇がアポロギア篇の想起の上に建てられてゐる如く、第一卷よりし

て其構成はクリトン篇の想起に據る所甚だ大であると評し得るが——其大作を擧げずとも、小篇中篇に於て、言一度國家論に及ぶ時、當篇に考察された諸問題が幾度か繰返されてゐるのを、人は見るであらう。反對にまた、彼が徳を擧示し、進んで

『我々にとつて生き甲斐があるか、かの者が汗害されてしまつても——不正が其を害し正義が其を益する其者が。それとも、其が我々の如何なる部分であらうとも、不正義と正義の徳とが一つに其に懸つてゐる其者、プロタゴ三一三Aを、我々は肉體よりも劣つたものであると考へてゐるか』(四七E)と談じ、更に

『我々にとつては單なる生活にはあらずして、善き生活が尊重さるべきである。』(四八B)

と結び、

理論(ロゴス)がかく把握してゐる限り(四八C)

其考察こそ勉められねばならない、と説く處、プラトンがソクラテスより課せられた、と我々が當初に語つた、魂眞理眞こと、同字異解、徳が熱心に學ばれてゐる。しかし其學習に際して彼が働かしたものは、心と心とが相觸れ、相即相入する深智慧ではなく

て、物を對象化して考察する、其限りに於て相觸相即を拒避する、外觀的なる思惟理性・ロゴスであつた。彼は先づ理論的に規範を設立し、其に因つてソクラテスを價値づけてみた、プラトンは好んで此態度を幾度か取つてゐる、シムボシオンに於ても、バイドン篇に於ても。しかし此方法は、如何に推理の嚴正を以てしても、判定者の心境が被判者に及ばざる場合、其當を失する懼れがあり、更に其規範が理論的に不可論駁的なる時は、其失當をすら氣づかざらしめる、そこで眞の學者はむしろ端的に大聖の具體的行動の中に我々の規範を求めねばならない、是をこそ私淑とは謂ふのである。クリトン篇に於けるプラトンの賢者としての努力は確かに失敗してゐる、しかし哲學者としての第一歩を茲に彼は踏み出だし、理論的哲學を出生せしむるに到つたのである。

哲學上當篇に於て就中見逃してならないものは、次の一句であらう。曰く

『我が有する者のうち、推理上我に最善として現はれたる理(ロゴス)論其以外の何ものにも従はない』(四六B)

人若し進んでゴルギアス篇——其處では善について典型的目的論が展開され、行爲の規範が理魂の法に判定されてゐる——をしらべ、更にバイドン篇の根據(アイチア)

論——其處ではアナクサゴラスの理性(ノウス)即ち原因の説に端を發し、自然認識の根據を最善に求むべきを説き、一轉してアナクサゴラスの機械觀を皮肉りつゝ、ソクラテスの逃亡しなかつた行動が最善の撰擇に由つて行はれたことを明かにし、之を目的論的に善と當爲(デオ)ン異解無きに非らず、但し此譯解を至當と考へる、即ちドイツ人の分詞的名詞が一切を綜結し集有してゐる(九七C—九九C)と結論してゐる、而して我々は、カント及カント派の所説は知らないが、全く徹底的に認識論的實行と倫理的實行との一根據としての善の優位を茲に看取するに難くはない——此程哲學的に偉大なる此論へと思想發展の跡を、勝れたる獵師の如く、追ふて行くならば、ポリティア篇の善の理想論(第六卷後半)が何ぞ計らんクリトン篇より生え抜いてゐることを看破するに、何程の事があらう。

クリトンの大聖推察が、かくも美しく彼の發展して行つた偉大なる哲學思想と、調和してゐるからと云つて、其故に、否其故にこそ、ソクラテス自體の行動と其理論とが調和してゐるとも、ゐたとも、主張することはできない、其は自から別問題である。孟子曰く

堯舜性之也湯武身之也五霸假之也久假而不歸惡知其非有也(盡心上)

プラトンのソクラテスに於ける亦復是の如くであつた。プラトン自身も、總てのプラトニコスも、其哲學的體系に驚異し、其説明に感歎し、眩惑して、ソクラテスの眞面目を没脚してしまつたのである。ソクラテスの法燈を傳へてゐる者もプラトンであるが、之を滅したのもプラトンであつた。我々は勿論其體系にも敬意を拂ふ、人一倍眞の敬意を拂つてゐる、しかし其故にソクラテスとの相違を見分けずにはゐられなかつた、而して見分けてソクラテスの獄中生活を見る時、其言行の不調和が特に問題になつて來るのである。

我々はソクラテス自身に聽かう——おゝソクラテス、君の名に於ける言論はプラトンの所論であるとして、端的に君の行動を我々は視てゆく、よつて我々の下した價值判断はクリトン篇の存在によつて動搖する程薄弱ではない。しかし社會の人々は我々の見識に疑惑を抱き、できることなら彼等が思斷してゐた様な安物であらんことを冀ひ、君の大聖を仰視し私淑することを好まぬ恐れがある、其は甚だ殘念である、そこで脱走しなかつたことについて、更に追放より死刑を受けたことについて、若し君自身に何等かの答へが有るならば、告げてほしい。

ソクラテスは恐らく靜に笑つて對へるであらう——だが君、考へてもみたまへ、此

年をして「アポロ・三七D・クリトン四三B・五三D」と。

▲分つた。屈原は死處を知り、ソクラテスは死時を識つてゐたのだ。彼は——アポロギア篇によるに——永い間培はれて來た彼に對する彈劾的風評を、法廷に於て許されてゐる單時間を以て、アテナイ市民の心より抜き去り、以て不正義、無思慮、不敬、虔なる行動に出でしめまい、のみならず、更に彼等を覺醒せしめ、心智と眞ことと魂と、即ち徳の配慮に向はしめようと、味死的辯明を試みた、而も遂に狂盲なるアテナイ市民は臆病なる市民を一蹴し、茲に六十票の差を以て有罪と決定されてしまつた。次に刑の提議がなされた、而して原告は死刑を至當としたに對して、被告ソクラテスの提議は大體先に述べられた如くであつた。即ち彼は、猶市民の反省を促す爲に、不可能なる提議——オリムピアの勝者の如くブリクタイオンに於て饗應に與かることを至當とした、下つて可能なる諸刑に對して其不當を明かにし、終に次の如き、彼等の耳には確かに人を喰つた文句を以て先づ一ムナーの罰金を認めた。曰く

『僕は自分自身を何等か悪いことに値打せしめることには全く慣れてゐない。そこで若しも僕に金が有つたとしたら、支拂得る限りの罰金を提議するでもあらう、其は僕を何等汗害しはしまいから。しかし僕は素寒貧である、従つて僕が提供し得る

だけの額を以て、諸君が僕を處罰しようと思ふのでないならば——だが恐らく僕は諸君に銀一ムナー(三十五圓程度)を提供することができ、よつて其だけを提議しよう。しかし、おゝアテナイの人々よ、此處にゐるプラトン、クリトン、クリトポウロス及びアポドロスは、僕には三百ムナーを提議せよ、彼等自身は保證に立つ、と言つてゐる、そこで僕は其金額を提議しよう、また此人々は諸君にとつて其だけの金の信賴するに足る保證人であるに相違ない。』(三、八B)

此傍若無人の提議を聽くに及んで、先には無罪の投票をした者までが逆上した、そこで更に八十票の差を加へて、彼の死刑は斷定されたのである。斷罪の後に更に訣別演説が語られてゐる、此演説の實際の存否如何については議論がある、しかし我々はかゝる訣別演説なるものが在り得よう、と得まいとを問はず、其内容に於て又其旋律の高調と其詩情の發露とに於て、是れプラトンの弔賦であると評する。其前半は同胞の無恥を悲しみ、其後半は死を、聖者の死を歎美してゐる、而して此處に描き出されたる死後の生活の想像は、ゴルギアス篇の詩話を過て、バイドン篇に其有終の美を發揮するに至つてゐる。

▲孔子曰く

邦有道危言危行邦無道危行言孫(憲問)

然るにソクラテスは既に死すべき時を識つた、故に彼は弟子達の諫言を却け、敢て立たずにもすんだ法廷に立ち、而も其の説くや諄諄、其の諫むるや諤諤、然り而して彼等の既に全く聽くこと能はざるを見ては、浩然として歸するの志を起し、而も猶一ムナ一の不可能なる罰金刑を以て、もう一度面罵することを怠らなかつた。彼は茲に、求むるに非らず、求めざるにも非らずして、豫期の如く此死を得た——此死、其によつて彼はアテナイの國家と國法と其市民とを、其横暴に於て誅してしまつた、而も其と同時に國家と國法を其尊嚴に於て生かし、プラトン及び後世に教ゆるに、其の重器たるを以てし、彼自身も亦、何人の批判に於ても、最も思慮に深く且最も正義なる人として、其赫たる德輝を以て萬世を照してゐる。是れ寔に伯夷の窺ひ知るべからざる所、武王も亦恐らくは及ばざる所、さて我々は此活動を何を以て評すべきであらうか。彼は實に死時を識つてゐた、識時の聖、然り、我々は聖の時を以てする。

孟子曰く

可以仕則仕可以止則止可以久則久可以速則速孔子也孔子聖之時者也公孫丑萬

章)

この可は以て矩に適ふことを示し、この則は以て時を表はす、造次顛沛必ず是に於てする底の麟鳳でなかつたならば、その可を知るとも、常に安んじてこの則に出づることばできない。ソクラテスの三十人執政に對する行動はどうかであつたか。我々はこの徳相を説明し得る規範を倫理學に於て求むることのできないのに苦しんだ、しかし今や其が聖の時によつて最も至當に説明されることを知つた。我々は孟子の如く、かく其を評し得よう。

其召之也有道、可以往焉、其命之也無道、可以去矣、可以往則往、可以去則去、可以默則默、可以論則論、蘇子也、蘇子、聖之時者也。

ソクラテスの徳相を、孟子の立てし聖の範疇とも呼ばるべき清和任時を以て、觀照し已つて、我々は茲に所期の綜合を成就し得た。清和任は猶其行動が所謂の超越的規範によつて律せられてゐるとも解される、しかしこの時に到つては、其人の全き徹底と其規範の全き具體化との生ずる所、即ち中聖の全機現に他ならない。至聖ソクラテス、我々が彼を以て至聖と呼び來つたのも、亦宜ではないか。

更に其死は如何。讀者は茲に至つて吾が拙譯・バイドンによつてすら、恐らくは其真相を読み抜き得て、彼の眞面目の洞察を誤りはしまひ。其譯序に曰く

『人若し茲に彼の爲す所、更に其の安ずる所を窺ひ得ば、眼前萬里、死もなく不死もなき大覺の士の偉大なりし人格を、プラトンにも劣らず、仰視し思慕せざるを得ないであらう。其靈魂不死不滅の理論の如き、其玄猷、素範を以てして、猶能く此幽廓の源際を測量するに足るべくもない。古人の曰く、花繁柳密處、撥得開、纔是手段、風狂雨急時、立得定、方見脚根』

哲學者を以て自ら任じてゐる人々とソクラテスを比するに、既に其所爲に於て天地懸隔せるの事實を如何ともすることはできない。其眞面目に於てソクラテスと伯仲する孔子、而も其著述と論語とによつて其端的を窺ふことが許されてゐる孔子、賢者としてはプラトンも及ぶ能はざる孟子等を古典に有する東洋に生れながら、唯洋式哲學在るをのみ知り、因つて自ら哲學者を以て任じて満足せる人々の、今の世に餘りに多きを見て、我々は驚嘆する、同時にまた敢て危言せざるを得ない——理相主義に誇り、玄猷素範の壁を抱いて、反つて至聖を明察するの見識を缺き、従つて眞徳を疎かにするの罪を犯すこと、自己の爲に、また文教の師表としては、人の爲に所謂哲學者の當に省み慎しむべきことではないか、と。

第五章 ソクラテス觀下

▲再び我々は言はう、徳は具體的なるものである、と。心が是非善惡を判断しても、其知が行に表現しなければ、徳とは言へない、而して其具體化の働きの即ち勇敢である。故に孔子曰く

見義不爲、無勇也(爲政)

我々が強つて徳を行ふ場合に、常に勇敢の缺乏を嘆せざるを得ざるに徴しても明かなる如く、總ての徳行には勇敢の徳が伴つてゐる。プロタゴラス篇の終りに考察されてゐる勇敢は、此種の勇敢であつて、其は知に従つて快不快に悩む自己に克つことである、と定義されてゐる、而して此克己即勇敢は其倫理學的定義に他ならない。然るに孟子は此勇敢を超越した眞勇を説いてゐるではないか、曰く、浩然の氣。志は氣の帥であり、氣は體に充ちてゐる、此志が純一無雜の姿を以て其氣を動かす處に、其眞勇は現はれる。倫理學的勇敢即ち世俗の勇敢は、純一無雜の超個人的、従つて自由なる、意志を理相とし、之を規範とし、之に服従して快不快に煩惱される反理相的個人的意向を克服し、當に行ふべき義務を遂行する處に、現はるゝに留まる。之に反して志

一にして氣を動かすの勇は其純一無雜の姿乃ち現實の姿であり、従つて其中に理相と反理相的者との對立を含むことなく、空即是色、色則是空、それこそ浩浩然として眞に無礙自在なる全機現である。故に孟子曰く

其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間(公孫丑)

我々が若しもソクラテスに此眞勇を認め得なかつたならば、前述の彼の諸行を、倫理學的に、深き智慧と強き意志との勝利として説明する以上に出づることは、第三者よりの觀察として、或は不節制の譏りを免れないであらう。然るに我々が先に彼の正義、思慮等の德行に於て、配義與道の浩然の氣を觀たるが如く、また彼は特に勇敢の徳と名づくべき、至大至剛、塞于天地之間なる浩然の氣を發露せる傳を後世に遺してゐるのである。彼の死、是れ彼が最後に顯揚せし眞勇でなくて何であるか。一面に於ては生と價值とを絶叫せしこと現時の哲學者の師たるに相應はしかつたプラトンも、他面、死と涅槃の演習(バイドン八一A)とを語らずにはゐられなかつた、是れ泰西の諸哲に殆ど見ることのできない彼獨特の色彩であり、而も其が全く東洋的筆致を以て描かれてゐるのは、彼が此非泰西的死に驚異したからであり、また、生死有無の彼岸に達してゐたソクラテスが、東涌西沒、自在に兩端を使ひこなした、其巨人の後を慕

へる賢者でもあつたからである。

▲さてソクラテスは四十歳前後にポタイダイア、デリオン等に出征した(アポロ二八E・ラクスー八一B)其時に彼の示した異類の勇敢は、シムポシオン篇に於て、アルキピアデスの讚美演説中に述べられてゐる。曰く

『しかし若し諸君が戦鬪に於てを望むなら——彼の爲に其事を語るのは至當であるから——かの戦鬪の際に僕に將軍等が勇敢賞を授與した時のかの戦に於て、此人のみが僕を救つてくれたのである、傷ついた僕を彼は見棄てようともせず、武器をも此僕自身と一緒に救ひおゝせた。そして僕は、おゝソクラテス、其時將軍等に其賞を君に與へるように勧めたのであつた、苟くも此事を僕が偽つてゐる、と云つて君は咎めはしまし、然るに將軍等が僕の功績を見て僕に勇敢賞を與へようど欲した時に、君自身よりも寧ろ僕が其を獲る様にと、將軍等よりも君が非常に熱心であつた。更にも、おゝ諸君、デリオンよりの退却に際して戦陣を放棄した時のソクラテスは、之を觀る價值があつた——と云ふのも其時僕は馬に乗つて側にゐたし、彼は甲冑をつけてゐたから。さて軍兵は既に四分五裂され、此人とラクスとが一緒に退却した、僕は丁度之に邂逅し、そして彼等を見つけるなり、兩人に勇氣を出す様にと勵まし、かつ兩人

を僕は決して見棄てない、と告げた。其時にはポタイダイアの時より一層よくソクラテスを僕は観た——なせかと云へば僕自身は馬に乗つてゐたので太して怖れなかつたから——第一にどれ程彼が自若たる點に於てラケスを凌駕してゐたかを、更に少くも僕には彼が、おゝアリストパネス、君の表現通りであつた様に思はれた、即ち彼處で彼は丁度あの場面雲姫三六二の様に、得々と氣取りすまして左右をうち見やり、靜々と味方敵方を見まわしながら、歩みを進めた、そして遠巻きにしてゐる誰彼にも、若し誰か、此人に指一つでも觸れようものなら、激しく逆襲されると云ふことは、明かであつた。其故に安全に此人と其戰友とは退いた。なせかと云へば戰爭に於てかく振舞ふ者に誰も殆ど手出しをしない、むしろ退き進み行く者を人は追ふにとどまるから。』(二二〇D—二二一B)

ラケスも亦此時の事を思ひ起してリシマコスに語つてゐる、曰く

『デリオンからの逃走に際して此人は私と一緒に退却したのです、私は貴方に敢て語りませう——若しも他の者どもが皆此人の如くであり得たならば、我々の都市は赫として其威を失はず、またかの時もあんな敗北に陥らなかつたに相違ない、と。』(ラケス)

我々は此戰鬪場裡のソクラテスを見る時、其勇敢が腕力の自信からでも、武術の嗜みからでもなく、むしろ其氣が全く宇内を呑んでゐたのである、と評さずにはゐられない。孟子曰く、我四十不動心と、彼も亦既に四十、其不動心も亦既にかくの如くであつた。

▲アルキピアデスはまたソクラテスが陣營生活の間に示した特異の行動を告げて、彼の忍耐力を稱揚してゐる。其行動は勿論驚異に値する、しかし我々東洋人にとつては特に珍しいとも思はれないが、膽力を練つた豪傑よりは、己を遮ぎる何ものをも破らでは措けぬ、感情の激しい所謂英雄を知ること多き泰西に於て、其は我々の想像以上に、不可思議であるに相違ない。さて其辭に曰く

『其後我々は一緒にポタイダイアに出陣し、彼處で食卓を共にしてゐた。先づ第一に彼は困苦缺乏に際して、啻に僕のみならず、他の總ての人々を凌駕してゐた——我々がよく戰陣で經驗する通り、どこかに遮斷されて食糧を得られなくされた場合に、他の者どもは忍耐力に於て全く零であつた——反對にまた御馳走の場合にも彼のひとり其を大いに享樂することができたし、就中酒は、別に飲みたいと望みはしないが、薦められた場合には、其量に於て總ての人々を抜き、而も特に感歎させられること

は、ソクラテスが酔拂つてゐるのを誰も嘗て見たことがなかつたのである。此事の證明は今直ぐにでもできると僕は思ふ。また嚴冬に耐へる點に於ても——彼處の冬はきびしかつたが——彼は驚歎することを屢々行つた。特に或時霜が非常にはげしくて、總ての人々は外へ出ないか、或は外へ出る場合には、驚く程厚着し、靴をはき、足を毛氈や羊皮で包んだのに、此人は其中を其までいつも着つけてゐた通りの衣服を纏つて出て行つたし、靴をはかすとも氷上を、他の靴をはいてゐる者どもよりも、平氣で進んだ、そこで他の兵士たちは、彼が自分達を馬鹿にしてゐるかの様に思つて、彼を横目で見たものである。其は其通りであつたが、或時彼處の陣營でしかしまだ屈強のものゝふが是をば行ひ耐へし有様は、げに耳傾ける値打がある。と云ふのは何か思惟を始めて彼は朝から其處に立つた儘考察してゐた、而も其が彼に成就しなかつたので、立つて探究を續け、やめようともしなかつた。そして既に眞晝になつたが、人々は猶彼を見た、そして驚いて互に、ソクラテスは何か熟慮して立つてゐると談し合つた。遂にイオニア兵の或者どもは、既に夕方になつたので、夜食をすませ、時はあたたかも眞夏であつたから、寢臺を外に持ち出し、夜氣の中にやすむと同時に、彼を、夜通し立つてゐるか、と見守つてゐた。彼は太陽の昇るまで立つてゐた、そして太陽を拜

してから去つて行つた。』(二一九E 二二〇D)

彼の豪酒健啖、耐寒は其異常なる健康を物語つてゐる、醫者からすれば其健康は生れながらであると説明され了るかも知れない、しかし心身一如に立脚してゐる神仙的保健法を知る我々東洋人より見れば、其はまさに養氣の結果である。頭寒足熱は陰陽中和の象である、心火は上騰せんとし、水氣は下降せんとする、心氣丹田に聚る時は則ち混渾として火水中和し、身は健に、心は壯に、従つて識は明、情は穩、意は強となり、茲に大丈夫を作る。若し心火昇り水氣降る時は、心身分裂し、血氣腦漿を侵して、舉措落着かず、感情は好惡に左右されて、動く猶磯の荒波の如く、其氣狂して趨る時は顔面朱を加へ、一度大事に面して蹶く時は、火氣身外に逸し去つて、顔色反つて蒼白たるに至る。かくの如くなる者は日常、其智は犀利、以て宇宙人生を論ずるに足り、其辭は華麗、以て無見識の弱輩を驚歎せしむるに足ると雖も、萬に一つの具體化するの力を缺く、若し夫れ其所安を問ふ孔子、知言の孟子、ソクラテスの如きに面したならば、空しく其形骸を曠野に暴らすことは必然である。概念的思索を追ふ者は、理相 (Type 理想は Ideal) の直觀を誇る前に、此失有るを心すべきではあるまいか。

さてまたソクラテスが一晝夜を立ち明かしたる事蹟は如何。之を忍耐の例とし

て語るより他に其術を知らなかつたプラトンには、想像だに及ばなかつた事に相違ない。我々は之に禪那正思惟を推定せざるを得ない。なせかと云へば、かゝる行動あつてこそ、我々は所謂知識ならぬ其深き智慧も、其勇敢も、更に其養氣も寔に宜なるを首肯し得るからである。彼の眞深智は獨覺より來つた、門より入るは家珍に非らず、如何に彼がアナクサゴラスやピタゴラス派の思想を學究したからとて、如何に論理的思索を追つたとて、其等よりして其智は來るべくもない。人若しソクラテスの如く、眞似るに非らず、眞に其如く、一晝夜を參究に立ち明かし、麗かなる太陽の光を仰いだならば、正に忽焉として落節し覺悟するであらう。忽焉、エクサイブネースとして覺悟する、其は美其自體の直觀(シムボニー)なんて事ではない。眞理を告子の如く言に得ることを以て満足せず、眞ことを孟子の如く、よし言に得ずとも——勿論言に求められ得る筈もないが——之を心に求めんと工夫するならば、其人は必ず落節する、落節し自得して思ふ時、恐らくは吾が言に従ふであらう。茲に我々は進んで、彼の諸徳諸行の所由であり、彼の所安であつた深き智慧、其覺悟の程も亦語るべきであるが、其は智論第二に譲ることにする。

▲ソクラテスはまた稀に見る論師であつた。凡そ異端を舐排し、自己所信の道を

世に行はれしめんとする者は、必ず論を以てする。楊墨等の流行と説客の蜂起との間に身を置いた儒教の闘士孟軻、ソピステスの流行の後を受けたるプラトン、また大乘勃興時に於ける西域の論師、我々は彼等の間に相似たる點を發見するに難くはない。試に孟軻をとつて見るに、世評の由來は知らないが、而も世評通り、ソクラテス——プラトンの論鋒を用ゐること屢々であつた。算數天文音樂の例引、判斷の反省を以てする義の内在の力説、感覺と心思との對立の説——其理智的傾向に於て東西殆ど其軌を一つにしてゐる。しかし其間に勿論自ら相違がある。ソクラテスの心智を理想としつゝも、之を理解せんと努め、同時に世間を見まもつたプラトンは、純理論的批判的考察によつて、新規なる理相主義を建設した、大聖孔子に私淑した孟子は、其理智をあらゆる方面に於て破邪顯正の手段としたが、無言自得の心境を第一義とした點に於て、釋尊の自内證を中心とした西域論師と其趣を同じくしてゐる。而して其等の理智がどにかく一様に建設的傾向を追つてゐるに對して、獨覺ソクラテスの全然破壊的であつたのである。彼は痺れ纏の如く、彼と談論したが最後、人は動けなくなる、とメンノが呻いた(八〇A)通り、當時の如何なる智者を捕へても、無知の知まで導かねばやまなかつたのである。此點に於て彼は無戲論如來文殊の流を汲んだ

者である。我々は其論語、其語録、無きを甚だ残念に思ふ、なせかと云へば西洋式學者は節制の徳を尊ぶの餘り、或人が可能なる最高の評價を受けることを喜ばず、生ある人間は總て自分に似た凡夫であり、神のみ完全であると主張すべきである、と信じてゐる、しかし文獻が充分であれば不承知を唱へはしまいから。さてしかし文殊彈指の聲を聞き得た者ならば、プラトンの敘述を通して其眞面目を覬覦するに難くはない。是は智論の課題である、よつて今は、云はゞ幾多の方面からソクラテスの面影をできるだけだけ讀者の心に焼きつける爲に、勇敢を讚したる後に續いて、アルキビアデスが彼の言辭を嘆美したる言葉を次に照會しよう。

『其他の多くの驚異すべきことを以て人はソクラテスを讚美することができ、しかし他の事蹟について恐らく人は、他の人々の上にも同様なることが言へよう。然るに人々の誰とも——古への人とも今時の人とも——異つてゐる、其事が何より驚異に値する。なせかと云へば、アキレスの人となりを以て人は(スバルタの勇將)ブラシダスや他の人を譬へ、またペリクレスの人となりを以て(ヘラス方の智將)ネストルや(トロヤ方の)アンテノルに比し、他にも色々な人があり、そして異なる人々を同一點を以て相比することができ、しかし其稀有なる所性に於て此人の如きを——其人

物と其言語の如きを——人は索ねることも、全然發見することはできまい、今の世の人の中にも古への人の間にも、苟くも僕が譬へて言つた所の者に人が彼を比しないならば、即ち僕は彼を人間の中の何人にも比しないで、彼自身と其言葉をシレーノスとサチロス等に比したが。さてまた此一事を初めに話さずにをいたが、彼の言語も、開扉されたシレーノスの像と全く同様である。人がソクラテスの言を聞かうと欲する時、其言は最初の中は極めて滑稽に見える、其様な字句文句を其言は被つてゐる——其は人を喰つたサチロスの皮なのだ。なせかど云へば彼は荷騾だの鍛冶屋だの靴屋だの鞣皮屋だのを口にし、而も常に同じ事柄を以て同じ事を言つてゐる様に見える、そこで無智な無理性な人間は誰も其言葉を馬鹿にして笑ふのである。しかし其開扉されたところを見、其内部に入る者は、第一にあらゆる言辭の中で唯彼の言のみが理性を有することを發見し、更に徳の最も神々しき最も多くの像を其中に藏し、而も將に美しくもまた善き者たらんとする者にとつて考察するに相應しい程のものゝ最も多きに、否寧ろ一切に亘つてゐるのを發見するに相違ない。』(二二二C—二二二A)

右で先にシレーノスやサチロスに譬へたとあるのは、此演説の最初に用ゐられた

譬喩を受けたので、シレーノスはバクコス神に従ふ半神・ダイモンにして、醉狂諧謔の老夫を以て像られ、智慧と豫言とに長けてゐると考へられてゐる、坊間に其像が賣られてゐたが、其は胎藏式で、其腹部を開扉すると、其中に神像が安置されてゐた。またサチロスもバクコス神の従者、笛に長けたる山羊身の半神、其鼻の上にしやくれてゐる様は、ソクラテスの鼻に似てゐるとされてゐた。此東洋的な鼻の覺者若し我々がアルキビアデスであつたなら、羅漢にでも比したであらう。

また彼の言語の批評も面白い。孟子曰く

言近而指遠者善言也、守約而施博者善道也、君子之言也、不下帶而道存焉、盡心下眞に消化し盡してゐれば、七面倒な概念を並べ立てずとも、手當り次第の事相を以て教化することが出来る。世尊は一つの拈花を以て眞諦を迦葉に傳へ、法華は露地の大白牛車を以て大乘一乘を説き、法藏は金獅子を拉し來つて則天武后の爲に華嚴の玄諦を教ゆる等、みな理事無礙に達してゐるからである。人生價値理相——かゝるものを説教する者、時に其人物の反つて無價値極まる形骸たることがある。思ふに其は眞理が腦の味噌漬けになつたまゝであるが故であらう、シレーノスの胎藏式——然り、若し性善と教へらるれば其發輝を、若し超越的意志の内在を聽けば其全機現

を願ひ努力せんとするならば、僅々三尺之を臍下丹田に下して消化しきへすればよいのである。さはさりながら其工夫の甚だ難い上に、其努力の重大事たるを思ふ者すら、當論首のソクラテスの警告に徴する迄もなく、極めて稀有である。

▲我々は既に彼の行動を觀照し、而して今其大論師の面影に接した、こゝに至つて彼の言行一致は今更云ふ迄もないことである。其は眞勇と眞智との所産である、世に所謂る知行合一、其は従つて唯一人ソクラテスに於てのみ、泰西にあつては眞に具體化されてゐたのである。プラトンは初期の諸作に於て處々に次の如きことを言つてゐる。

語り得ることは、また知つてゐることである。

知つてゐれば、また語ることができる筈である。

惡を行ふ者は、惡を惡と知らず、むしろ善であると思つてゐるからである。

善と知れば、人は之を行ふ、惡と知つて行ふ者はない。

故に徳は善惡の知識である。

かゝる主張は、知言行一致の大聖ソクラテスを背景とし、彼をして言はしめてゐるが故にこそ、強き説服力を持ち得てゐるに他ならない。先にも言及した通り、プラトン

は、結極理相主義に走りはしたが、猶此大聖の化を受け、其巍々乎たる雄姿を仰ぎ見て、専ら徳の考察を勵んだ、是れ誠に、彼に言行一致の尊重が有り、而も其が、特にもソピステスの有言無實との對照に於て、是も亦恐らくは泰西に於て唯一節、最も美しく描き出されてゐる所以である。我々は其一節、武人ラケスの武人に相應しき皮肉なる警句を今茲に譯出し、以て一先づソクラテス聖傳と其觀察とから離れよう。

『おゝニキアス、少くも談論に對する私の態度は單純である、しかし又單純ではなくて、二重である』と云つてもよい。と云ふのも私は人に談し好き、ピロゴスでもあり、また反對に談し嫌ひ、ミソロゴスでもあると思はれようから。なせかと云へば私は、徳について、また或智慧、技能について、人が談ずるのを聽く場合、其人が語つてゐる言葉に眞に値してゐる人であるならば、語つてゐる人と語られてゐることゝ同時に眺めて、其が相互に適當し調和してゐるので、此上もなき悦びを感ずる。そしてかゝる人は全く音樂的であると私には思はれる、最も美しき調和に調和されてゐて、しかしリラや慰みの樂器に於ける調和にはない、むしろ其人自身は眞實に、其事業に關する其言葉と全く共鳴してゐる、其生活に於て (Baldern) の讀みによる調和されてゐる、端的にドリア式、しかしイオニア式ではない、またフリギア式でもリディア式でもあるま

いと思ふ、だが其のみこそがヘラス的調和なのである。そこでかゝる人は談論によつて私を悦ばしめ、人々に談し好きであると思はれしめる、全くかゝる場合に私は其言葉を率直に受け入れる。しかし之と反對な行動をなす人は私を不快にする、特により上手に語れば語る程、いよいよ不快ならしめ、そこでまた反對に談し嫌ひであると思はれしめる。私はまだソクラテスの談論には無經驗であるが、前以て、確かに、其行爲を識つた(テリオンの戰)ことがある、そして其際、彼は美しき談論と、全く腹藏なく語るに値する人物であることを私は發見したのである。』(ラケス一八八C—E)

孔子曰、有徳者必有言、有言者不必有徳、仁者必有勇、勇者不必有仁(憲問)